



# 仲間がいればがんばれる

If you have partners, you can do your best.

## ——職業訓練の意義——

今村 榮一\*

16年前、私は、ある職業能力開発施設（当時は技能開発センターと呼んだ。）の訓練課長として勤務していた。

訓練の主なものは、離転職者の方々の再就職に向けたアビリティー訓練、在職者の方々のスキルアップを目指す能力開発セミナーで、特に、アビリティー訓練は、パソコン、ワープロの普及率が急速に進むなか、情報関係の訓練科に応募者が殺到する状況であった。このような実状から、女性対象の6カ月訓練OAサービス科を設置していた。

ある日、情報系の先生から、パソコン、ワープロの操作技能を習得したいと何度も来所されている女性に、ぜひ会ってもらいたいとの申し出があり、私はその先生と一緒に面会した。

彼女は、言葉、手足に障害のある方で、パソコン、ワープロの操作を学びたい一途な思いを、ゆっくりとした言葉、大きな声で手振りを混せて話され、その熱意に私はじっと聞き入った。彼女の話聞きながら、夢を実現してあげるため何とかしなければとの思いを感じたが、受け入れにあたっては、いくつかの課題を整理して解決する必要がある、その日は、前向きに検討することを約束して引き取りを願った。

それから、所長をはじめ教職員全員が協議したが彼女の受け入れについて一致した理解を得るまでには、そう多くの時間は要しなかった。障害者を受け入れる施設整備を緊急に行い、担任の先生には、訓

練実施について万全を期すようお願いし、入校を許可した。

担任の先生の配慮と熱意ある指導は、クラス全員の理解が得られるとともに協力体制や意識が醸成され、訓練は順調に進行した。

いよいよ修了を迎える日が近づいたある日、私は、彼女に「これまでの6カ月間の訓練生活で習得したこと、感じたことについて感想文をワープロで提出してもらえないか。」とお願いした。

彼女は、快諾してくれ、数日後、私の机上にワープロで打たれた感想文が置いてあった。そのタイトルは、「たよりなくかすかな<sup>わだち</sup>轍」である。この文章を読むたびに目頭が熱くなり「仲間がいればがんばれる」職業訓練の意義を強く感じるのである。

先生としての範疇にとどまらず、訓練生1人ひとりを大切に指導してくれた熱血漢あふれる担任の先生は10年後講義中突然教壇で倒れ帰らぬ人となった。

志半ばで倒れた、先生の無念さなどを思い起こすとき、痛恨の極みとして私の脳裡から一生離れることはない。

### 「たよりなくかすかな<sup>わだち</sup>轍」

登山家はそこに山があるから、山に登るといふ。

一步一步、自分の足だけを頼りに……………

霊峰大山を望みながら、精一杯生きることできたこの半年をふりかえり、ふとそんなことを思い浮

\*前 福山職業能力開発短期大学校 校長

かべた自分である。

施設という枠の中で30年過ごした自分だが、「障害者」であるとあらためて自分自身で認識したのも、ここ数年のことで、それまでの自分がいかに井の中の蛙だったかおぼろげに見えてきた。障害者だからやりたいことができないんだとか、同じことをやって同等には扱ってもらえないんだとか、そんな気持ちの渦の中で、もう一度自分に残されたものは何かないだろうかと興味のあったワープロの勉強ができるところをいろいろ尋ねた。

しかし、やはり「障害者」が職業的能力をさがすのは、たやすい道ではなかった。障害の程度にもよるのだろうが、気持ちと肉体は往々にして反比例してくれるのだ。自惚れにも近い何か自分が問い掛けた。「たとえ、それが自己満足にすぎなくてもいいのではないか、何かをやらなければいけないのでは？」世の中とはそんなたやすいものではなく、ここセンターを訪れ、第一番目の答えとして返ってきた言葉は「障害者を受け入れる対応がないのでひとまず諦めてはいただけないか」ということだった。しかたないとは思いながらも二度三度と通った。それではという計らいで入所の許可をいただけた。

それと同時に肩に荷の重さを痛感したのも確かだった。「やはり障害者はダメかと言われないように！」との数人の友人の励ましが何よりも胸に響いた。自分としても健常者の人々と共に学ぶことすら思いも

しないことだった。

事実、速度はどうしてもかなわなかった。パソコンのエラーメッセージに夢の中でうなされた夜も何度か、ワープロのプリンターの音が我が家に帰っても耳から離れないこともあった。検定試験もやはり速度が伴わず、だれにも知られないようにと一人涙を噛み締めた。明るいクラスメートと先生方の隔たりのない指導の中で何の引け目も感じなかったものの、その毎日は緊張の連続だった。

いかに現代社会にワープロ・パソコンの普及率が多く、家庭でも独学で使用可能になるといっても、自分がこの技能開発センターで学び受けたものは計り知れない。先生との出会い、人々の出会い、ワープロとは、パソコンとはどんなものなのか、おそらく他のところではここまで自分のものとして身に付かなかっただろう。半ば、何度となく「速さがついていかないのに、このまま続けても……」とあきらめてしまいそうになったこともあったが、ただひたすらに自分のため60kmの道程を送り迎えをしてくれた父、母、毎朝玄関で見送ってくれた祖母、何気ない言葉で支えてくれた弟……、その顔を見る度に「最後までやらねば」と思い直した。

たよりなくかすかな轍……それは他人にとってほんの点にも満たないものかもしれない。が、願わくばいつの日にか誰かの目印になれば、それが何より自分の幸いである。

